

# 『從吾道人語録』の研究

——「把巻録」(上)——

水野 実・三沢 三知夫 編

## 序 言

本稿は『從吾道人語録』の研究——「求心録」(下)——に続く「把巻録」(上)の基礎的研究で体例等はすべて前稿に従うものである。なお『從吾道人語録』、董溪に関する略説は前々稿を参照されたい。

この研究の参加者は次の通り。宮下和大(早稲田大学助手)・阿部光麿(早稲田大学非常勤講師)・大場一央(早稲田大学大学院博士後期課程)・松野敏之(早稲田大学大学院博士後期課程)・中島諒(早稲田大学大学院博士後期課程)・小池直(早稲田大学大学院博士後期課程)・上村新治(早稲田大学大学院修士課程)・田村有見恵(早稲田大学大学院修士課程)・阿部亘(早稲田大学大学院博士後期課程)・原信太郎(早稲田大学大学院修士課程修了)・富岡健太郎(早稲田大学大学院修士課程修了)・三沢三知夫の十二名。全員で検討・修正した原稿を基に、宮下・阿部光・大場・松野・中島・小池・阿部亘・三沢の諸兄と再三検討

を行い、最後に三沢君と補正を行い、三沢君にまとめてもらった。

この度の研究成果の最後の責任は水野にあるが、参加者全員、特に三沢君をはじめ宮下・阿部光・松野君の業績でもあることを明記しておく。

## 【一】

汝と回也孰愈章、蓋聖人知子貢用心於外、故言此以觀之。而子貢果以聞一知十為答。其役志於口耳知識、而不能心解力行也甚矣。故聖人哂之曰、如此弗如邪。吾固以汝為弗如也。聖人引而不發、使子貢能識聖意、則將曰、賜也何敢望回。箒瓢陋巷、回能安貧、賜不能也。非礼勿動、回也克己、賜不能也。三月不違、回能久仁、賜不能也。博文約礼、回能伝習、賜不能也。虚無不校、回能無我、賜不能也。屢空坐忘、回能幾聖、賜不能也。賜之所能者、言語而已、方人而已、臆度而已。豈回之比乎。竊意、聖人必喜之矣。

### 〔訓読〕

汝と回と孰れか愈れるの章、蓋し聖人、子貢の心を外に用ふるを知り、故に此れを言ひて以て之を觀る。而して子貢果たして一を聞きて十を知るを以て答へを為す。其の志を口耳知識に役せられて、心解力行する能はざること甚だし。故に聖人之を哂ひて曰く、此くの如くんば如かざるか。吾固より汝を以て如かずと為す、と。聖人引きて発せず、子貢をして能く聖意を識らしむれば、則ち將に曰はんとす、賜や何ぞ敢へて回を望まん、と。箒瓢陋巷、回能く貧に安んじ、賜能くせざるなり。礼に非ざれば動く勿れ、回や己に克ち、

賜能くせざるなり。三月違はず、回能く仁を久しくし、賜能くせざるなり。博文約礼、回能く伝習し、賜能くせざるなり。虚無にして校らず、回能く我無く、賜能くせざるなり。屢々空しくして坐忘す、回能く聖に幾く、賜能くせざるなり。賜の能くする所の者は、言語のみ、方人のみ、臆度のみ。豈に回の比ならんや。竊かに意ふ、聖人必ず之を喜ばん。

〔語釈〕

○汝与回也執愈章 『論語』公治長第五に「子、子貢に謂ひて曰く、女と回と孰れか愈れる。対へて曰く、賜や、何ぞ敢へて回を望まん。回や一を聞きて以て十を知り、賜や一を聞きて以て二を知る。子曰く、如かざるなり。吾と女と如かざるなり」とある。「吾と汝と如かざるなり」(吾与女弗如也)について『論語集注』では「与」を「許」と訓じ、孔子が子貢の及ばないのを許したと解し、圏外では「一を聞き十を知るは上知の資、生知の亜なり。一を聞き二を知るは、中人以上の資、学びて之を知るの才なり」という胡氏の説を引く。王守仁はこの部分について「子貢は多く学びて識り、聞見上に在りて功を用ふ。顔子は心地上に在りて功を用ふ。故に聖人問ひて以て之を啓く。而るに子貢の対ふる所は、又只だ知見上に在り。故に聖人之を嘆惜す。之を許すに非ざるなり」(『伝習録』上、一一四條)と解している。朱熹が顔回と子貢の間にある差を認めつつも子貢には子貢の存在意義があるとするのに対し、王守仁は顔回と子貢の間にある差の大きさを強調している。本則には「聖人之を晒ひて曰く、此くの如くんば如かざるか。吾固より汝を以て如かずと為す」とあることから、董濤が王守仁の解釈を踏襲しているのは明らかである。

○志於口耳知識 『史記』卷六十七、「仲尼弟子列伝」に「端木賜、衛の人、字は子貢。孔子より少きこと三十一歳。子貢、利口巧辞にして、孔子、常に其の弁を黜く。問ふて曰く、汝と回と孰れか愈れる。…（以下、先に引用した『論語』公治長の部分が続く）」とある。

○箪瓢陋巷 『論語』雍也第六に「子曰く、賢なるかな回や。一箪の食、一瓢の飲、陋巷に在り。人は其の憂ひに堪へず、回や其の樂しみを改めず。賢なるかな回や」とある。

○非礼勿動 『論語』顔淵第十二に「顔淵、仁を問ふ。子曰く、己に克ちて礼に復るを仁と為す。一日己に克ちて礼に復れば、天下仁に帰す。仁を為すこと己に由る。而して人に由らんや。顔淵曰く、請ふ、其の目を問はん。子曰く、礼に非ざれば視ること勿れ、礼に非ざれば聴くこと勿れ、礼に非ざれば言ふこと勿れ、礼に非ざれば動くこと勿れ」とある。

○三月不違 『論語』雍也第六に「子曰く、回や其の心三月仁に違はず。其の余は則ち日月に至るのみ」とある。

○博文約礼 『論語』子罕第九に「顔淵、喟然として歎じて曰く、之を仰げば弥々高く、之を鑽れば弥々堅し。之を瞻るに前に在れば、忽焉として後に在り。夫子、循循然として善く人を誘ふ。我を博むるに文を以てし、我を約するに礼を以てす。罷まんと欲するも能はず。既に吾が才を竭くす。立つ所有りて卓爾たるが如し。之に従はんと欲すと雖も、由末きのみ」とある。

○虚無不校 『論語』泰伯第八に「曾子曰く、能を以て不能に問ひ、多きを以て寡なきに問ひ、有れども無きが若く、実つれども虚しきが若く、犯されて校いず」とある。「不校」については、『論

語注疏』に「校は報なり」、『論語集注』に「校は校計なり」とあるが、本則の訓読は後者を取り、「はからず」と読んだ。

○屢空 『論語』先進第十一に「子曰く、回や其れ庶きか、屢々空し。賜は命を受けずして貨殖す。億れば則ち屢々中る」とある。

○坐忘 『莊子』内篇大宗師に「曰く、回は坐忘せり、と。仲尼蹙然として曰く、何をか坐忘と謂ふ、と。顔回曰く、枝体を墮ち、聰明を黜け、形を離れ知を去りて、大通に同ず、此を坐忘と謂ふ、と」とある。

○言語 『論語』先進第十一に「德行には顔淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓、言語には宰我・子貢、政事には冉有・季路、文学には子游・子夏」とある。

○方人 人物比較、評価。『論語』憲問第十四に「子貢、人を方ぶ。子曰く、賜や賢なるかな。夫れ我は則ち暇あらず」とある。

○臆度 主観的な推測・思いこみ。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【二】

程子云、在物為理、処物為義。鄙意竊有疑焉。蓋吾心以為当然斯為事物之所当然。理不在物也。理在物謂之義外。心即是理。処物得宜、名之為義。

〔訓讀〕

程子云く、物に在るは理為り、物に処するは義為り、と。鄙意竊かに疑ひ有り。蓋し吾が心、以て当に然るべきと為すは斯れ事物の当に然るべき所為り。理は物に在らざるなり。理、物に在る、之を義外と謂ふ。心は即ち是れ理。物に処して宜を得る、之を名づけて義と為す。

〔語釈〕

○程子云、在物為理、処物為義 『易伝』艮卦に「艮は止為り。止の道は唯だ其の時のみ。行止動靜、時を以てせざれば則ち妄なり。其の時を失はざれば、則ち理に順ひて義に合す。物に在りては理為り、物に処するは義為り」とある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔三〕

往見先儒論天地云、凡有氣莫非天、有形莫非地。虛處皆天、实处皆地。離得一尺地即有一尺天。始悟屋中皆天、不但蒼蒼者為天也、其時心喜以為善言天矣。噫孰知其未尽乎。究而言之地皆天也、何嘗有地。若推其極天亦無也、何嘗有天。地因天而有形、天因地而有名。初學之士驟聞余言、則信不及、殊不知大塊体段原是如此。若能真知張子太虛無形之說自穢然矣。先儒有云天者理而已矣。此語至精、善狀天者無出於此。惜後世聞之者熟習以為常、而不能深知其妙也。今以字觀之、一大為天、會意也。天字微變則成无、言天体本无、指字也。天下加以四象則成炁、言无中生有、亦會意也。古人先得我心矣。又以画觀之、一者一元也、二者万象也、一即一、一即一也。伏羲只一画尽之矣。欲其明也故又画一。大德小德初非二物、此天地之所以為大也。張子曰、一故神、兩故化。而濂溪画作○、□又妙於伏羲矣。

〔訓読〕

往に先儒の天地を論ずるを見るに云く、凡そ氣有れば天に非ざるは莫く、形有れば地に非ざるは莫し、と。虚處皆な天、实处皆な地なり。一尺の地を離(得)れば即ち一尺の天有り。始めて屋中皆な天、但に蒼蒼なる者を天と為すのみならざるを悟り、其の時、心喜びて以て善く天を言ふと為す。噫、孰れか其の未だ尽きざるを知らん。究して之を言はば地、皆な天なり、何ぞ嘗て地有らん。若し其の極を推むれば天も亦た無な

り、何ぞ嘗て天有らん。地、天に因りて形有り、天、地に因りて名有り。初学の士、驟かに余の言を聞き、則ち信じ及ばず、殊に大塊の体段、原より是れ此くの如きを知らず。若し能く真に張子の太虚無形の説を知らば自ら釈然たらん。先儒、云ふ有り、天なる者は理のみ、と。此の語、至精にして、善く天を状する者にして此れに出づる無し。惜しむらくは後世、之を聞く者、熟習して以て常と為して、深く其の妙を知る能はず。今、字を以て之を觀るに、一大を天と為す、会意なり。天字、微かに變ずれば則ち无と成る、天の体本无を言ふ、指字なり。天の下、加ふるに四象を以てすれば則ち炁と成る、无中に有を生ずるを言ふ、亦た会意なり。古人、先んじて我が心を得たり。又、画を以て之を觀れば、一は一元なり、二は万象なり、一は即ち一、一は即ち一なり。伏羲、只だ一画にして之を尽くす。其の明らかなるを欲するが故に又、二を画す。大徳・小徳、初めより二物に非ず、此れ天地の大たる所以なり。張子曰く、一なるが故に神、兩なるが故に化す、と。而して濂溪、画して○と作す、殆んど又、伏羲に妙なるかな。

〔語釈〕

○凡有氣莫非天、有形莫非地 『河南程氏遺書』卷第六、二先生語六、三七条に「凡そ氣有らば天に非ざるは莫し、凡そ形有らば地に非ざるは莫し」とある。

○張子太虚無形之説 『正蒙』大和に「太虚無形、氣の本体」とある。

○天者理而已矣 『河南程氏遺書』卷第十一、明道先生語一、師訓、一七〇条に「天は理なり」とある。

○会意 六書の一つ。二字もしくは二字以上の字の意味を組み合わせる造字法。



○指字 指事の誤りか。指事は六書の一つ。字形によって意味を表す造字法。

○炁 氣字の別体。

○張子曰、一故神、兩故化 『易說』説卦伝に「一物兩体なる者は氣なり、一なるが故に神、兩なるが故に化す、此れ天の參たる所以なり」とある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

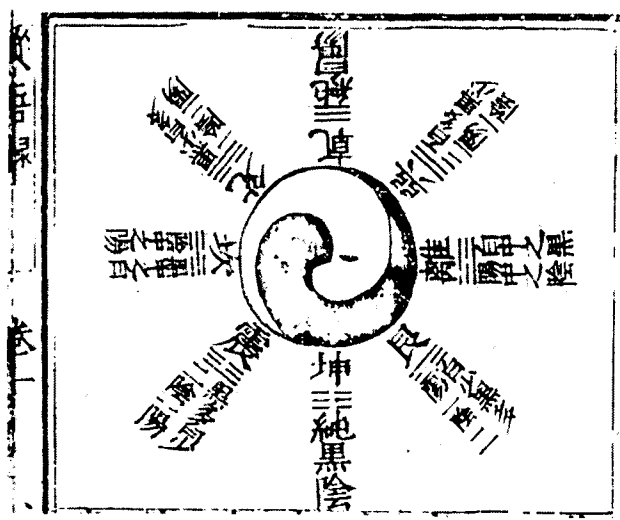
〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔校異〕(四)

「尊經閣文庫本」は「□」を「殆」に作り、本則はこれに従って読んだ。

希夷太極圖



此図康節先生得之李挺之、挺之得之穆伯長、伯長得之於陳希夷者、是也。任道遜先生詩云、太極図中一氣旋、兩儀四象五行全。先天八卦渾淪具、万物何嘗出此圈。造化根源・文字祖、図成太極自天然。當時早見周夫子、不費安排作正伝。

【訓読】

此の図、康節先生、之を李挺之に得、挺之、之を穆伯長に得、伯長、之を陳希夷に得る者、是れなり。任道遜先生の詩に云く、太極図中一氣旋り、兩儀四象五行全し。先天八卦渾淪として具はる。万物何ぞ嘗て此の圈より出でん。造化の根源・文字の祖、図、太極を成すこと自ら天然。當時早く見れば、周夫子、安排を費さずして正伝を作らん。

○康節先生（一〇一一—一〇七七） 宋代易学家。名は雍、字は堯夫、康節は諡。象数学派中に一家をたて、先天象数の学を世に知らしめた。その易学は陳搏の道教的思想と易理を結合するものであった。著作に『皇極經世』・『擊攘集』がある。

○李挺之（？—一〇四五） 宋代易学家。名は之才、挺之は字。穆修に師事し、その伝を得、陳搏の図書学派に属する。その易学は卦變説を主とし、邵雍に伝えられた。

○穆伯長（九七九—一〇三二） 宋代文学家、易学家。名は修、伯長は字。朱震の「進周易表」には「陳搏、先天図を以て种放に伝へ、放、穆修に伝へ、修、李之才に伝へ、之才、邵雍に伝ふ」・「修、太極図を以て周敦頤に伝へ、敦頤、程頤・程顥に伝ふ」とあり、邵雍・周敦頤・二程に対して深い影響を有した。

○陳希夷（八七一—九八九） 五代宋初の道士。名は搏、字は図南。希夷は諡号。その易学は『参同契』の流れをくみ、宋代象数学派及び図書学派の祖。

○任道遜（一四二七—一五〇三） 字は克誠、坦然居士と号し、著作は『雲山樵語』のみであったが、そこには邵康節の風があると評された。

○周夫子（一〇一七—一〇七三） 宋代易学家、道学の創始者。名は敦頤、字は茂叔、号は濂溪。二程の師であり、その太極図は儒家易の理論的根柢となった。

○安排 あれこれととりはからうこと。

〔校異〕（一）

本図説は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕（二）

本図説は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕（三）

本図説は『明儒学案』には収められていない。

濂溪太極圖



此太極圖濂溪先生所自作、蓋先生未嘗見希夷之圖也。故任公惜之、而以此圖為費安排、不若前圖一筆混成也。今以二圖並觀、雖工拙不同、而其黑白環抱彼此無異。非其不約而相符、亦不足以驗造化如是之妙也。然此二圖皆後天之象。惟本圖上○者此無極、先天之本体、而先生所傳於壽涯者、亦嘗見於稽古略。然亦未嘗外後天而有所謂先天也。要在以意□□。

〔訓読〕

此の太極図は濂溪先生自ら作る所、蓋し先生未だ嘗て希夷の図を見ず。故に任公之を借しみて、此の図を以て安排を費やし、前図の一筆混成に若かずと為す。今二図を以て並べ觀るに、工拙同じからずと雖も、而れども其の黑白の環抱は彼此異なる無し。其の約せずして相符ふに非ず、亦た以て造化是くの如きの妙を驗するに足らず。然も此の二図、皆な後天の象。惟だ本図上の○は此れ無極、先天の本体にして、先生の寿涯より伝へられし所の者も、亦た嘗て稽古略に見る。然れども亦た未だ嘗て後天を外にして所謂先天有らざるなり。要は意を以て之を悟るに在り。

〔語釈〕

○任公 任道遜。

○先生所伝於寿涯者、亦嘗見於稽古略 寿涯は鶴林寺寿涯。寿涯と周敦頤の關係について、『郡齋詠書志』卷一上、程氏易十卷の条には「頤の解を考ふるに象數に及ばず、頗る胡瑗に類するのみ。景迂云ふ、胡武平、周茂叔、潤州鶴林寺の僧寿涯を師とし、其の後、武平其の学を家に伝へ、茂叔は則ち二程に授く」とあり、周敦頤は寿涯より易を伝授されたとする。「稽古略」とは元覺岸編の『釈氏稽古略』か明幻輪編の『釈鑑稽古略統集』のことであろうか、両書にも寿涯と周敦頤の間の伝授を述べた箇所はない。

〔校異〕(一)

本図説は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本図説は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本図説は『明儒学案』には収められていない。

〔校異〕(四)

「尊經閣文庫本」は「□□」を「悟之」に作り、本則はこれに従って読んだ。

【四】

杜弼答魏帝曰、止是一理。在寛成寛、在陋成陋。若論性体、非陋非寛。所成雖異、能成恒一。帝善之。

〔訓読〕

杜弼魏帝に答へて曰く、止だ是れ一理。寛に在りては寛を成し、陋に在りては陋を成す。若し性体を論ずれば、陋に非ず寛に非ず。成す所は異なると雖も、能く恒なる一を成す、と。帝之を善しとす。

〔語釈〕

○杜弼 北齊の人、字は輔玄。問答の出典は『北史』卷五十五。『北史』には「又問ふて曰く、説者妄りに皆な法性は寛、仏性は愜と言ふは如何と。弼曰く、寛に在りては寛を成し、愜に在りては愜を成す。若し性体を論ずれば、愜に非ず寛に非ずと。詔して曰く、既に寛を成し愜を成すを言はば、何ぞ愜に非ず寛に非ざるを得んと。弼曰く、若し定めて是れ寛ならば、則ち愜為る能はず。若し定

めて是れ愜ならば、亦た寛為る能はず。寛に非ず愜に非ざるを以てすれば、成す所異なるも、能く恒なる一を成すと。上、称善す」とある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔五〕

人皆以聖人為多知。而不知聖人初不貴於此也。故其言曰、默而識之、学而不厭、誨人不倦。何有於我哉。言日用之間、所存心致力者、不過如此三者、此外更無所有也。又曰、出則事公卿云云。何有於我哉。亦此意。皆示学者不必深求。故曰、二三子以我為隱乎。吾無隱乎爾。可謂至明白矣。而学者不悟道心何時而清明乎。愚謂万世学者大病、只要学知識、不肯学如愚。

〔訓読〕

人皆な聖人を以て多知と為す。而れども聖人初めより此を貴ばざるを知らず。故に其の言に曰く、黙して之を識り、学びて厭はず、人を誨へて倦まず。何か我に有らんや、と。言ふところは日用の間、心を存し力



を致す所の者は、此くの如き三者に過ぎず、此の外に更に有る所無きなり。又、曰く、出づれば則ち公卿に事へ云云。何か我に有らんや、と。亦た此の意なり。皆な学者必ずしも深く求めざるを示す。故に曰く、二三子我を以て隠すと為すか。吾隠すこと無きのみ、と。至つて明白と謂ふべし。而るに学者、道心何れの時にして清明なるかを悟らず。愚謂へらく、万世の学者の大病は、只だ知識を学ぶを要め、肯へて愚の如くなるを学ばず。

〔語釈〕

○黙而識之、学而不厭、誨人不倦。何有於我哉 『論語』述而第七に「子曰く、黙して之を識り、学びて厭はず、人を誨へて倦まず。何か我に有らんや」とある。

○出則事公卿云云。何有於我哉 『論語』子罕第九に「子曰く、出でては則ち公卿に事へ、入りては則ち父兄に事ふ。喪の事は敢へて勉めずんばあらず。酒の困れを為さず、何か我に有らんや」とある。

○二三子以我為隠乎。吾無隠乎爾 『論語』述而第七に「子曰く、二三子、我を以て隠せりと為すか。吾は爾に隠すこと無し」とある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔六〕

龜山先生游於程門。程子以道南許之。是其得吾道之正伝也、審矣。先儒未能窺其奥、反謂其言之過高。凡稍涉精微者、一切削而不録、惜哉。今於雜書中略録、其數句亦足以見先生之所造矣。龜山云、屢空者不以一物置其胸中也。子貢貨殖未能無物也。又云、形色天性也。則踐形斯尽性矣。故惟聖人為能与釈氏色空之論一也。愚謂孟子以形色為天性、恐不必更加理字。然此章惟樂庵李氏一説最得之。

〔訓読〕

龜山先生、程門に遊ぶ。程子、道、南すを以て之を許す。是れ其れ吾が道の正伝を得たること、審らかなるかな。先儒未だ其の奥を窺ふ能はず、反つて其の言の高きに過ぐるを謂ふ。凡そ稍や精微に渉る者、一切削りて録せず、惜しきかな。今、雜書中の略録に於て、其の數句、亦た以て先生の造る所を見るに足る。龜山云ふ、屢しば空しき者は一物を以て其の胸中に置かざるなり。子貢は貨殖して未だ物無きこと能はざるなり、と。又た云ふ、形色は天性なり。則ち形を踐めば斯に性を尽くすなり。故に惟だ聖人のみ能く釈氏色空の論と一たり、と。愚謂へらく、孟子は形色を以て天性と為し、恐らくは必ずしも更に理の字を加へざらん。然れば此の章惟だ樂庵李氏の一説のみ最も之を得たり、と。

〔語釈〕

○道南 『河南程氏外書』卷第十二、伝聞雜記、六〇条に「明道甚だ喜び、毎に言ひて曰く、楊君、最も会（得）すること容易なり。…吾が道、南すと」とある。

○龜山云、屢空者く未能無物也 『龜山集』卷十四、答問、「答胡德輝問」に「其の心、三月、仁に違はずと答ふるは、則ち蓋し時として違ふこと有り。然して其の復ること遠からざれば、則ち其の空なるや屢々なり。空なる者は一物を以て其の胸中に置かざるなり。子貢、貨殖して未だ物無きこと能はず」とある。「屢空」・「貨殖」は『論語』先進第十一に「子曰く、回や其れ庶きか、屢々空し。賜は命を受けずして貨殖す」とある。

○又云、形色天性也。く釈氏色空之論一也 『龜山集』卷八、経解、「孟子解」形色天性に「形色即天性也。則踐形斯尽性矣。故惟聖人為能与釈氏色空之論一也。…」とある。「形色」・「天性」は『孟子』尽心上に「孟子曰く、形色は天性なり。惟だ聖人にして然る後に以て形を踐むべし」とある。

○楽庵李氏一説 楽庵李氏は名は衡、字は彦平（一一〇〇—一一七八）。外戚張説が節度使となり兵権をにぎると力めて其の事に反対した。『楽庵語録』卷二に「惟だ聖人のみ然る後に以て形を踐むべし、未だ聖人の地位に到らざれば則ち可ならず。蓋し形とは、耳目口鼻なり。彼、此くの如きを欲して我、之に従ふ、是れを之れ踐と謂ふ。其の言に反せずして之を言を踐むと謂ひ、其の行に反せずして之を行を踐むと謂ふが如し。目、視を欲して吾、其の視を遏めず、耳、聴を欲して吾、其の聴を遏めず、口、味を欲して吾、其の味を遏めず、鼻、臭を欲して吾、其の臭を遏めず。吾、是

の耳目口鼻の欲に従ふと雖も、声色臭味に随はずして去く。此れ夫子七十にして心の欲する所に従ひて矩を踰へざるなり。顔子の若きは則ち礼に非ざれば視聽言動する勿れ。勿は禁戒の辞。此れ未だ達せざること一間の所以なり」とある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【七】

龜山先生詩云、聖門事業學須強。俚耳從來笑折楊。詭遇獲禽非我事。但知無有是吾鄉。盈科日進幾時休。到海方能止衆流。只恐達多狂未歇。坐馳還愛鏡中頭。

〔訓読〕

龜山先生の詩に云ふ、聖門の事業は学びて須く強なるべし。俚耳、從來、折楊に笑ふ。詭遇獲禽は我が事に非ず。但だ知る、有る無きはれ吾が郷を。科を盈たし日に進み幾時か休まん。海に到りて方めて能く衆流を止む。只だ恐る、多きに達し狂未だ歇めざることを。坐馳して還た愛す、鏡中の頭、と。

〔語釈〕

○ 龜山先生詩 『龜山集』卷四十二、詩五、七言絶句に「聖門事業学須彊。俚耳從來笑折楊。詭遇得禽非我事。但知無有是吾郷」とある。

○ 俚耳從來笑折楊 『莊子』外篇天地に「大声は里耳に入らず。折楊・皇荂には則ち嗑然として笑ふ」とあるのをふまえる。「大声」は立派な音楽、「折楊」・「皇荂」はともに古代の俗曲の名。俚(里)耳は俗人の耳のこと。

○ 詭遇獲禽非我事 『孟子』滕文公下に「之が為に詭遇すれば、一朝にして十を獲たり」とあり、「詭遇」とは御者の法を廢し、禽獸を射とめること。

○ 無有是吾郷 『莊子』内篇逍遥遊の「無何有の郷」を念頭においたもの。

○ 盈科日進 『孟子』離婁下に「科を盈たして後に進む」とある。

○ 坐馳 『莊子』内篇人間世に「吉祥も止まるところに止まる。夫れ且た止まらず、是れを之れ坐馳と謂ふ」とある。

〔校異〕(一)

本則是『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則是『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【八】

慈湖楊先生論夫子之道忠恕云、忠是忠直、恕是平恕。即此是道、聖人於他章或言忠不言恕、或言恕不言忠、皆此意也。此是曾子偶舉此二字。或舉孝弟、或舉仁義、或灑掃應對、或事親從兄、隨分舉之、皆是也。恐無体用天人之說、先儒或失之鑿矣。蓋為忠恕違道不遠一句所誤、此或子思伝差、非曾子意也。愚謂若拘体用天人之說、雖老師宿儒猶不能明。況望於門人小子愚夫愚婦者乎。

【訓読】

慈湖楊先生、夫子の道は忠恕のみを論じて云く、忠は是れ忠直、恕は是れ平恕。即ち此れは是れ道、聖人他章に於て或は忠と言ひ、恕と言はず、或は恕と言ひ、忠と言はず、皆な此の意なり。此れは是れ曾子偶々此の二字を挙げればなり。或は孝弟を挙げ、或は仁義を挙げ、或は灑掃應對、或は親に事へ兄に従ふ、分に随ひて之を挙ぐる、皆な是なり。恐らくは体用天人の説無きに、先儒或は之を鑿に失ふ。蓋し忠恕道を違ふこと遠からずの一句の誤まる所と為るは、此れ或は子思の伝の差ひ、曾子の意に非ず。愚謂へらく、若し体用天人の説に拘せば、老師・宿儒と雖も猶ほ明らかにする能はず。況んや門人の小子・愚夫愚婦なる者に望むをや。

【語釈】

○慈湖楊先生論夫子之道忠恕云、忠是忠直、恕是平恕 『慈湖遺書』卷十、家記、論論語上、四七条に「忠は是れ忠直、恕は是れ平恕、夫子の道は坦然として甚だ明らかにして、余蘊有る無し、之を一貫と謂ふ」とある。「忠恕」は『論語』里仁第四に「曾子曰く、夫子の道は忠恕のみ」とある。

○此は曾子偶舉此二字、或舉孝弟、或舉仁義、或灑掃應對、或事親從兄、隨分舉之、皆是也 『慈湖遺書』卷十、家記、論論語上、四四条に「孝弟と曰はずして、忠恕と曰ふ。蓋し曾子、其の通ずる所の処より之を言ひ、曾子をして之を縦言せしむれば則ち仁義のみと曰ふも、亦た可なり。礼敬のみと曰ふも、亦た可なり。和樂のみと曰ふも、亦た可なり。中のみと曰ふ、正のみと曰ふ、順のみと曰ふも、亦た可なり。灑掃應對のみと曰ふも、亦た可なり。事親從兄のみと曰ふも、亦た可なり」とある。

○恐無体用天人之説、先儒或失之鑿矣 『論語集注』卷二、里仁第四の圈外説に「程子曰く、己を以て物に及ぶ、仁なり、己を推して物に及ぶ、恕なり、道を違ふこと遠からずとは是なり。忠恕一以て之を貫く、忠は天道、恕は人道、忠は無妄、恕は忠を行う所以、忠は体、恕は用、大本達道なり。此と道を違ふこと遠からずと異なるは、動くに天を以てするのみ」とある。

○子思伝差 『慈湖遺書』卷十、家記、論論語上、四八条に「中庸篇に忠恕、道を違ふこと遠からずと曰ふは子思の記言の訛なるか」とある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【九】

季文子三思後行、横渠以為、聖人深美之詞。若曰再思可矣、況能三邪。陽明先師以為聖人不許之詞曰、文子雖賢再思可矣、恐未能三也。二夫子□□不約而同。以見人肯三思者之難得也。先儒以三則私意起而反惑、恐因左伝之語而遷就聖言以付会之。非聖人意也。觀書當以己意求之乃可耳。

〔訓読〕

季文子三たび思ふて後、行ふ、横渠以て聖人深く美とするの詞と為す。再思すれば可なり、況んや能く三たびするをやと曰ふが若し。陽明先師以て聖人許さざるの詞と為して曰く、文子、賢と雖も再思すれば可なり、恐らくは未だ三たびする能はざるなり、と。二夫子の文、約せずして同じきを言ふ。以て人肯へて三思する者の得難きを見す。先儒以へらく、三たびすれば則ち私意起こりて反りて惑ふ。恐らく左伝の語に因りて聖言に遷就して以て之に付会するならん。聖人の意に非ざるなり。書を觀るは当に己の意を以て之を求むべくんば乃ち可なり。

〔語釈〕



○季文子三思後行 『論語』公冶長第五に「季文子、三たび思ひて而る後に行ふ。子、之を聞きて曰く、再び思へば斯れ可なり」とある。

○季文子三思後行、況能三邪 『慈湖遺書』卷十、家記、論語上、五五条に「季文子三たび思ふて後行ふ、子、之を聞きて曰く、再び思へば可なりと。張横渠以て聖人深く美とするの詞と為す。再びすれば斯れ可なり、況んや三たびする能ふをや、と曰ふが若し」とある。

○先儒以三則私意起而反感、恐因左伝之語而遷就聖言以付会之、非聖人之意也 『論語集注』に「程子曰く、悪を為すの人、未だ嘗て思有るを知らず、思有らば則ち善を為す。然らば再びするに至らば則ち已に審かなり、三たびすれば則ち私意起りて反りて惑ふ、故に夫子之を譏る」とある。「左伝の語」とはおそらく「三たび肱を折りて良医と為ることを知る」（定公十三年）をさす。「遷就」とはあれこれとこじつけること。

〔校異〕（一）（『陽明先生遺言録』上、四七条）

○若曰再思可矣 『遺言録』は「若曰再斯可矣」に作る。

○陽明先師以為聖人不許之詞曰 『遺言録』は「陽明先師」を「伊川」に作る。

○文字雖賢再思可矣 『遺言録』は「文字雖賢再斯可矣」に作る。

○二夫子□□不約而同 『遺言録』は「二先生之言不約而同」に作る。

○先儒以三則私意起而反感、く觀書当以己意求之乃可耳 『遺言録』にはこの部分はない。

〔校異〕（二）

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔校異〕(四)

「尊經閣文庫本」は「□□」を「文言」に作り、本則はこれに従って読んだ。

〔十〕

慈湖楊先生云、未能事人、焉能事鬼、以形觀人則人固可見、以神觀人固不可見也。人唯不知生故不知死、不知人故不知鬼。人寢不離牀褥、而夢遊千里之外、豈七尺之軀所能圍哉。人執血氣以為己、故判為二而不知其未始有異也。

〔訓読〕

慈湖楊先生云く、未だ能く人に事へず、焉んぞ能く鬼に事へん、形を以て人を觀れば則ち人固より見るべし、神を以て人を觀れば固より見るべからず。人唯だ生を知らざるが故に死を知らず、人を知らざるが故に鬼を知らず、と。人寢るとき牀褥を離れずして、夢に千里の外に遊び、豈に七尺の軀の能く圍する所ならんや。人、血氣を執りて以て己と為し、故に判ちて二と為して其の未だ始めより異なること有らざるを知らず。

〔語釈〕

○慈湖楊先生云、く以神觀人固不可見也 『慈湖遺書』卷九、家記三、論礼樂、六条に「孔子曰く、

未だ人に事ふること能はず、焉んぞ能く鬼に事へん、と。蓋し曰く、人を知らば則ち鬼を知る。形を以て人を觀れば、則ち人固より見るべし、神を以て人を觀れば、則ち人固より見るべからず。」とある。

○未能事人、焉能事鬼 『論語』先進第十一に「季路、鬼神に事へんことを問ふ。子曰く、未だ人に事ふること能はず、焉んぞ能く鬼に事へん。曰く、敢へて死を問ふ。曰く、未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん」とある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【十一】

觀九成宮帖、以人欲従、良足深尤。魏徵非游文中之門、何以及此。

〔訓読〕

九成宮帖を觀るに、人欲に以て従ふままにすれば、良に深く尤むに足ると。魏徵、文中の門に遊ぶに非ざ

れば、何を以て此に及ばん。

〔語釈〕

○九成宮帖 「九成宮醴泉銘」のこと。九成宮とは隋の文帝の仁寿宮を唐の太宗が修復して改名した  
もの。また顧炎武の『金石文字記』には「唐九成宮醴泉銘、魏徵の撰、歐陽詢の書」とある。

○以人欲従、良足深尤 「九成宮醴泉銘」には「觀其移山廻澗、窮泰極侈、以人従欲、良足深尤」とある。

○文中 王通（五八四―六一八）。文中子は諡号。『中説』を著し、魏徵はその門下。

〔校異〕（一）

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕（二）

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕（三）

本則は『明儒学案』には収められていない。

【十二】

蓋有不知而作之者、聖人以為蓋有不由良知而作之者。我無是也、若以多聞多見為知、乃其次耳。天然是非之心乃真知也。

〔訓読〕

蓋し知らずして之を作す者有りとは、聖人以為へらく、蓋し良知に由らずして之を作す者有り。我是れ無しとは、若し多聞多見を以て知と為せば、乃ち其の次のみ。天然是非の心は乃ち真知なり。

〔語釈〕

○蓋有不知而作之者、く乃其次耳 『論語』述而第七に「子曰く、蓋し知らずして之を作る者有らん。我は是無きなり。多く聞きて其の善き者を択びて之に従ひ、多く見て之を識すは、知るの次なり」とある。

〔校異〕（一）（『陽明先生遺言録』上、四八条）

本則は『陽明先生遺言録』と一致する。

〔校異〕（二）

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕（三）

本則は『明儒学案』には収められていない。

【十三】

朝聞者一旦有悟也、夕死可矣。通乎昼夜而知也。故曰知而信者為難。先儒信不過、嫌於近禪而以窮究物理為聞、併失程子之意矣。

〔訓読〕

朝に聞くととは、一旦悟れば、夕に死すとも可なり。昼夜を通じて知るなり。故に曰く、知りて信ずるを難しと為す、と。先儒、信じ過ぎず、禪に近づくを嫌ひて物理を窮究するを以て聞と為し、併せて程子の意を失ふ。

〔語釈〕

○朝聞者一旦有悟也、夕死可矣 『論語』里仁第四に「子曰く、朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり」とある。

○通乎昼夜而知也 『易』繫辞上傳に「昼夜の道を通じて知る」とある。

○知而信者為難 『河南程氏遺書』卷第十一、明道先生語一、師訓、七三条に「皆な実理なり。人知りて信ずる者を難しと為す。孔子曰く、朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり。死生亦た大なり。誠に道を知るに非ざれば則ち豈に夕べに死すを以て可と為さんや」とある。

○先儒信不過、く而以窮究物理為聞 『論語集注』に「道は事物当然の理なり。苟も之を聞くを得れば、則ち生に順ひ死に安んじ、復た遺恨無し」とある。

〔校異〕(一) (『陽明先生遺言録』上、四九条)

本則は『陽明先生遺言録』と一致する。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔十四〕

君子所貴乎道者有三美焉。蓋誠能聞道則貌也、色也、詞也、三者無不善也、籩豆之事則有司存、非所急矣。

〔訓読〕

君子、道に貴ぶ所の者に三美有り。蓋し誠に能く道を聞くは則ち貌や、色や、詞や、三者、善からざる無ければ、籩豆の事は則ち有司存し、急ぐ所に非ず。

〔語釈〕

○君子所貴乎道者有三美焉。籩豆之事則有司存 『論語』泰伯第八に「君子の道に貴ぶ所の者は三つ。容貌を動かしては斯に暴慢を遠ざく。顔色を正しては斯に信に近づく。辞氣を出だしては斯に鄙倍を遠ざく。籩豆の事は則ち有司存せり」とある。

〔校異〕(一) 『陽明先生遺言録』上、五〇条

本則は『陽明先生遺言録』と一致する。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【十五】

顏淵喟然歎曰、始吾於夫子之道、但覺其高堅前後無窮、無方体之如是也。繼而夫子循循善誘、使我由博約而進、至於悅之深而力之尽、如有所立卓爾。謂之如者非真有也、謂之有者又非無也、卓然立於有無之間、欲從而求之則無由也已。所謂無窮、無方体者、曾無異於昔時之見。蓋聖道固如是耳。非是未達一間之說。

【訓読】

顏淵喟然として歎じて曰く、始め吾、夫子の道に於けるや但だ其の高堅前後、窮尽無く方体無きを覚ゆることはくの如きなり。繼ぎて夫子、循循として善く誘ひ、我をして博約由りして進め、悦の深くして力の尽く、立つ所有りて卓爾たるが如きに至らしむ、と。之を如と謂ふは眞の有に非ず、之を有と謂ふも又た無に非ず、卓然として有無の間に立ち、従ひて之を求めんと欲すれども則ち由無きのみ。所謂窮尽無く方体無く、曾て昔時の見に異なる無し。蓋し聖道固より是くの如きのみ。是れ未だ達せざること一間の說に非ず。

【語釈】

○顏淵喟然歎曰、く欲從而求之則無由也已 『論語』子罕第九に「顏淵、喟然として歎じて曰く、之を仰げば弥々高く、之を鑽れば弥々堅し。之を瞻るに前に在れば、忽焉として後に在り。夫子、循循然として善く人を誘ふ。我を博むるに文を以てし、我を約するに礼を以てす。罷まんと欲するも能はず。既に吾が才を竭くす。立つ所有りて卓爾たるが如し。之に従はんと欲すと雖も、由末きの



み」とある。

○無窮尽無方体 『論語集注』に「此れ顔淵深く夫子の道の窮尽無く、方体無きを知りて之を歎ず」とある。

○悦之深而力之尽 『論語集注』に「此れ顔子、自ら其の学の至る所を言ふ。蓋し悦の深くして力の尽く、見る所益々親づきて、又其の力を用ふる所無し」とある。

○所謂無窮尽無方体者、曾無異於昔時之見 『論語集注』で、「顔淵喟然歎曰、仰之彌高、鑽之彌堅。瞻之在前、忽焉在後」に注して「無窮尽無方体」とあるのは、顔淵の孔子觀・孔子の境地を述べたものであり、「夫子循循然善誘人、博我以文、約我以礼」に注して「言夫子道雖高妙、而教人有序也」とあるのは、学の段階を述べたものであり、「如有所立卓爾。雖欲從之、末由也已」に注して「此顔子自言其学之所至也。……とあるのは、顔淵の至った境地を述べたものであるとされる。『論語集注』の解釈にしたがえば、「顔淵喟然歎曰、仰之彌高、鑽之彌堅。瞻之在前、忽焉在後」と「如有所立卓爾。雖欲從之、末由也已」の間には前者が先であり、後者が後といった時間的先後関係があることになる。本則の「昔時之見」は、「顔淵喟然歎曰、仰之彌高、鑽之彌堅。瞻之在前、忽焉在後」に「無窮尽無方体」〔集注〕と注して顔淵の孔子觀・孔子の境地を述べたものを指し、それが「如有所立卓爾。雖欲從之、末由也已」に「此顔子自言其学之所至也。蓋悦之深而力之尽、所見益親、而又無所用其力也」〔集注〕と注して顔淵の至った境地を述べたものと同じことを言っている」と董澐は考えている。

○蓋聖道固如是耳、非是未達一間之說 『論語集注』に「楊氏曰く、自ら欲すべき、之れを善と謂ふ、充ちて大に至る、力行の積なり。大にして之を化すは、則ち力行の及ぶ所に非ず、此れ顔子の未だ達せざること一間の所以なり」とある。「未達一間」とは「充ちて大に至る」の顔淵と「大にして之を化す」の孔子の境地に差等を設けるものであるが、董濼は採らない。

〔校異〕(一) (『陽明先生遺言録』上、四一条)

○顔淵喟然歎曰 『遺言録』は「歎」を「嘆」に作る。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

## 【十六】

君子深造之以道、言以道而深造也、自得之妙。口耳皆喪、方是深造。王信伯云、自得処無分毫得。

〔訓読〕

君子深く之に造るに道を以てすとは、道を以て深く造り、自得するの妙を言ふ。口耳皆な喪はれて、方めて是れ深く造る。王信伯云ふ、自得の処、分毫の得無し、と。

〔語釈〕

○君子深造之以道、言以道而深造也、自得之妙 『孟子』離婁下に「君子深く之れに造るに道を以てするは、其の之を自得せんことを欲すればなり」とある。

○王信伯 王蘋（一〇八二—一一五三）。信伯は字、号は震沢。程門の高弟であり、著作に『論語集解』・『王著作集』がある。

○自得処無分毫得 『王著作集』卷八に「自得の処、豈に分毫の進むを得んや」とある。

〔校異〕（二）（『陽明先生遺言録』上、四二条）

本則は『陽明先生遺言録』と一致する。

〔校異〕（二）

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕（三）

本則は『明儒学案』には収められていない。

【十七】

四五十而無聞焉、聖人謂不聞道也。非無声聞也。

〔訓読〕

四五十にして聞こゆる無しとは、聖人は道を聞かざるを謂ふ。声聞無きに非ず。

〔語釈〕

○四十五而無聞焉 『論語』子罕第九に「四十五にして聞こゆること無くんば、斯れ亦た畏るるに足らざるのみ」とある。

〔校異〕(一) (『陽明先生遺言録』上、五二条)

○四十五而無聞焉 『遺言録』は「焉」の字がない。

○聖人謂不聞道也 『遺言録』は「謂不聞道」に作る。

〔校異〕(二) (『伝習録』上、一〇六条)

○四十五而無聞焉 『伝習録』は「焉」の字がない。

○聖人謂不聞道也 『伝習録』は「是不聞道」に作る。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

### 【十八】

君子居之、何陋之有、蓋無入不自得之意。若曰所居則化、則於中国有礙。

〔訓読〕

君子之に居れば、何の陋か之れ有らん、蓋し入るとして自得せざる無きの意。若し居る所則ち化すと曰はば、則ち中国において礙有り。

〔語釈〕

○君子居之、何陋之有 『論語』子罕第九に「子、九夷に居らんと欲す。或ひと曰く、陋、之を如何せん。子曰く、君子之に居らば、何の陋か之有らん」とある。

○若日所居則化 『論語集注』に「君子の居る所則ち化せば、何の陋か之有らん」とある。

〔校異〕(一) (『陽明先生遺言録』上、五一條)

○若日所居則化 『遺言録』は「若日所居者化」に作る。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

### 【十九】

吾有知乎哉、人皆以聖人為多知、而不知聖人初不事於知識也。故曰無知也。有鄙夫問於我。我只空空而已。但於所問、只拏是非之兩端、如此而為是、如此而為非。一如吾心之天理以告之斯已矣。蓋聖功之本、惟在於此心純乎天理。而不在於才能。從事於天理、有自然之才能。若但從事於才能、則非希聖之學矣。後人不知此意、專以聖人博學多知而奇之。如商羊、萍實之類以為聖人不可及者、在此尽力追之、而不知聖人初不貴也。故曰君子多乎哉、不多也。又曰賜也、汝以予為多學而識之者歟、非也。

〔訓読〕

吾知ること有らんやは、人、皆な聖人を以て多く知ると為せども、聖人初めより知識を事とせざるを知らざるなり。故に曰く、知ること無しと。鄙夫有りて我に問ふ。我は只だ空空たるのみ。但だ問ふ所に於て、只だ是非の兩端を挙げ、此の如くして是と為し、此の如くして非と為す。一に吾が心の天理以て之に告ぐるが如く斯くなるのみ。蓋し聖功の本、惟だ此の心の天理に純なるに在りて、才能に在らざらん。天理に従事すれば、自然の才能有り。若し但だ才能に従事すれば、則ち聖を希ふの学に非ず。後人此の意を知らず、専ら聖人の博学多知なるを以て之を奇とす。商羊、萍実の類の如きは以て聖人の及ぶべからざる者と為し、此に在りて力を尽くして之を追ふ。而れども聖人の初めより貴ばざるを知らざるなり。故に曰く、君子多なるか、多ならざるなり、と。又曰く、賜や、汝、予を以て多く学びて之を識る者と為すか、非なり、と。

〔語釈〕

○吾有知乎哉。只舉是非之兩端 『論語』子罕第九に「子曰く、吾知ること有らんや、知ること無きなり。鄙夫有り、来たつて我に問ふ、空空如たり。我、其の兩端を叩きて竭くす」とある。

○商羊、萍実 商羊については『孔子家語』卷之三弁政第十四に「孔子曰く、此の鳥は名を商羊と曰ふ。水の祥なり。昔、童兒其の一脚を屈し、兩眉を振訊し、跳り且つ謡ふもの有りて曰く、天將に大に雨ふらんとして、商羊鼓舞すと。今、齊に之有るは其の応至れるなり」とある。萍実については『孔子家語』卷之二致思第八に「王、使をして魯に聘し、孔子に問はしむ。子曰く、此れ所謂萍実という者なり。剖きて之を食ふべし。吉祥なり。唯だ覇者のみ能く獲ることを為すと」とある。商羊と萍実、双方とも聖人の予言が適中した例としてあげられており、本則においては常人には及

びがたい聖人の知の表徴として用いられている。

○故曰君子多乎哉、不多也 『論語』子罕第九に「大宰、子貢に問ふて曰く、夫子は聖者か。何ぞ其れ多能なる。子貢曰く、固より天縱の將聖にして、又多能なり。子、之を聞きて曰く、大宰、我を知れる者か。吾、少くして賤し。故に鄙事に多能なり。君子、多ならんや、多ならざるなり」とある。

○又曰賜也、汝以予為多学而識之者歟、非也 『論語』衛靈公第十五に「子曰く、賜や、女予れを以て多く学びて之を識る者と為すか。對へて曰く、然り、非なるか。曰く、非なり。予れは一以て之を貫く」とある。

〔校異〕(一) (『陽明先生遺言録』上、五三三條)

○而不知聖人初不事於知識也 『遺言録』は「而不知聖人初不從事於知識也」に作る。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【二十一】

発憤忘食、是聖人之志。如此真無有已事。樂以忘憂、是聖人之道。如此真無有戚時。恐不必云得不得也。

〔訓読〕

憤を發して食を忘るは、是れ聖人の志なり。此の如く真に已む事有る無し。樂しみて以て憂ひを忘るるは、是れ聖人の道なり。此の如く真に戚む時有る無し。恐らくは必ずしも得不得を云はず。

〔語釈〕

○ 發憤忘食、〵樂以忘憂 『論語』述而第七に「葉公、孔子を子路に問ふ。子路對へず。子曰く、女奚ぞ曰はざる、其の人と為りや、憤りを發して食を忘れ、樂しみて以て憂ひを忘れ、老いの將に至らんとするを知らざるのみと」とある。

○ 得不得 『論語集注』に「未だ得ざれば、則ち憤りを發して食を忘れ、已に得れば、則ち之を樂しみ憂ひを忘る」とある。

〔校異〕(一) (『陽明先生遺言録』上、五四条)

○ 如此真無有已事 『遺言録』は「事」を「時」に作る。

〔校異〕(二) (『伝習録』下、二四条)

○ 如此真無有已事 『伝習録』は「事」を「時」に作る。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。



【二十一】

夫道固不外於人倫日用。然必先志於道而以道為主、則人倫日用、自無非道。故志於道、是尊德性、主意也。拋於德、是道問學、工夫也。依於仁者、常在於天理之中。游於芸者、精察於事為之末。游芸与学文俱是力行中工夫。不是修德之外、別有此間事也。蓋心氣稍匱則非仁矣。故詩書六芸□□、皆輔養性情而成其道徳也。以志道為□、□修徳為工。全体使之純誠、纖悉不容放過、此明徳之事也。以上十條皆先師面命。

〔訓読〕

夫れ道は固より人倫日用に外ならず。然れば必ず先ず道に志して道を以て主と為せば、則ち人倫日用、自ら道に非ざる無し。故に道に志すとは、是れ尊徳性、主意なり。徳に拠るは、是れ道問學、工夫なり。仁に依るは、常に天理の中に在るなり。芸に遊ぶは、事為の末を精察するなり。游芸と学文は俱に是れ力行中の工夫なり。是れ徳を修むるの外に、別に此の間の事有らず。蓋し心氣稍や匱なれば則ち仁に非ず。故に詩書六芸等の事、皆な性情を輔養して、其の道徳を成す。道に志すを以て主と為し、徳を修むるを以て工と為す。全体、之をして純誠にし、纖悉も放過す容からざらしむるは、此れ明徳の事なり。以上十條皆先師面命す。

〔語釈〕

○志於道、く游於芸 『論語』述而第七に「子曰く、道に志し、徳に拠り、仁に依り、芸に遊ぶ」とある。

○面命 直接教えること。

〔校異〕(一) 『陽明先生遺言録』上、五五條

本則は『陽明先生遺言録』と一致する。ただし割り注の「以上十條皆な先師面命す」は『遺言録』にな  
い。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔校異〕(四)

○故詩書六芸□□ 「尊經閣文庫本」は「□□」を「等事」に作り、本則はこれに従って読んだ。

○以志道為□□修徳為工 「尊經閣文庫本」は「□□」を「主以」に作り、本則はこれに従って読ん  
だ。

〔二十二〕

雖聖賢經語、求之吾心有不合、亦当自有主張。慈湖先生疑形而上曰道二句非聖言、忠恕違道不遠一句失聖  
意。良亦可疑。愚於古之格言可疑者亦多矣。

〔訓読〕

聖賢の經の語と雖も、之を吾が心に求めて合はざること有らば、亦た当に自ら主張有るべし。慈湖先生、  
形而上を道と曰ふの二句は聖言に非ず、忠恕道を違ふこと遠からずの一句は聖意を失ふと疑ふ。良に亦た疑

ふべし。愚、古の格言に於て疑ふべき者、亦た多し。

〔語釈〕

○慈湖先生疑形而上曰道二句非聖言 『易』繫辭上伝に「是の故に形而上なる者、之を道と謂ひ、形而下なる者、之を器と謂ふ。化して之を裁する、之を爻と謂ひ、推して之を行ふ、之を通と謂ひ、挙げて之を天下の民に錯く、之を事業と謂ふ」とあり、『慈湖遺書』卷七、家記一、己易に「曰く、形而上なる者、之を道と謂ひ、形而下なる者、之を器と謂ふ。其れ聖言に非ず」とある。

○忠恕違道不遠一句失聖意 『中庸』に「忠恕、道を違ふること遠からず」とあり、『慈湖遺書』卷十、家記、論語語上、四八条に「中庸篇に忠恕、道を違ふること遠からずと曰ふは子思の記言の訛なるか」とある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【二十三】

晦翁云氣以成形而理亦賦焉、則是理氣合為一物矣。或改亦賦二字、作在是焉何如。愚意欲云理之成形因謂之氣焉又何如。

〔訓読〕

晦翁、氣は以て形を成して、理、亦た焉に賦すと云ふは、則ち是れ理氣合して一物と為す。或るひと「亦賦」の二字を改めて、「在是」に作るは何如、と。愚意へらく、理之れ形を成す、因りて之を氣と謂ふと云はんと欲するは又何如。

〔語釈〕

○晦翁云氣以成形而理亦賦焉 朱熹は「天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教」(『中庸』)に注して、「命は猶ほ令のごとし。性は即ち理なり。天は陰陽五行を以て万物を化生し、氣は以て形を成して理亦た焉に賦す、猶ほ命令のごとし」(『中庸章句』)とする。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【二十四】

曾文清公以儒釈同異請於王著作先生。先生曰、公本来処還有儒釈否。噫、至哉言乎、道一而已。儒者見之謂之儒、釈者見之謂之釈。

〔訓読〕

曾文清公、儒釈の同異を以て、王著作先生に請ふ。先生曰く、公の本来の処、還た儒釈有りや否やと。噫、至れるかな言や、道は一なるのみ。儒者は之を見て之を儒と謂ひ、釈者は之を見て之を釈と謂ふ。

〔語釈〕

○曾文清公、以儒釈同異請於王著作先生。先生曰、公本来処還有儒釈否 『王著作集』卷八には「曾文清公幾問儒釈異同。先生曰、公本来処還有儒釈否」とある。

○曾文清公 曾幾（一〇八四—一一六六）。字は吉甫。諡は文清。秦檜に怒られて罷め、後、台州の知となる。劉安世・胡安国に従学する。

○王著作先生 王蘋。

〔校異〕（一）

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕（二）

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕（三）

本則は『明儒学案』には収められていない。

【二十五】

濂溪先生初從東林總遊、久之無所入。總教之靜坐。先生於是靜坐月余、忽有所得。以詩呈曰、書堂兀坐万機休、日暖風和草自幽。誰道二千年遠事、而今只在眼睛頭。總肯之、遂与結青松社焉。出性学指要書。

〔訓読〕

濂溪先生、初め東林の総に従ひ遊び、之を久しくするも入る所無し。総、之をして静坐せしむ。先生是に於て静坐すること月余、忽として得る所有り。詩を以て呈して曰く、書堂に兀坐して万機休む、日暖かく風和らぎ草自ら幽たり。誰か道はん二千年の遠き事、而今、只だ眼睛の頭に在るのみと。総、之を肯じて、遂に与に青松社を結ぶ。性学指要の書に出づ。

〔語釈〕

○東林総 東林寺常総。『宋元学案』卷十二、濂溪学案下、附録に「性学指要謂、元公初与東林總遊、久之無所入。總教之靜坐、月余忽有得。以詩呈曰、書堂兀坐万機休、日暖風和草自幽。誰道二千年遠事、而今只在眼睛頭。總肯之、即与結青松社」とある。常総は臨濟宗黄竜派。東林寺に住し、大法を挙揚し、多くの門弟を育成した。蘇軾との交遊は有名。

○青松社 廬山に居を定めた周敦頤が白蓮社の故事を追慕して仏者と結んだ結社。

○性学指要 未見。『仏法金湯編』卷第十二、周敦頤の項に「宋儒惟だ濂溪、康節二公、仏書に於て

早く得る所有り。公の行状並びに性学指要」とある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔二十六〕

濂溪先生固是妙悟深造、亦是天生一種好情性、人不可及。觀其送趙清猷一詩、詞既精到、意□和厚、真佳作也。詩云、公暇頻陪塵外遊、朝天仍得送行舟。軒車更共入山脚、旌旆且從留渡頭。精舍泉声清澗澗、高林雲色淡悠悠。談經道奧愁言去、明日瞻思上郡樓。

〔訓読〕

濂溪先生固より是れ妙悟深造、亦た是れ天が一種の好き情性を生じ、人及ぶべからず。其の趙清猷を送るの一詩を観るに、詞既に精到、意、和厚に及び、真に佳作なり。詩に云ふ、公暇ありて頻りに陪ひて塵外に遊び、朝天仍ほ得て行舟を送る。軒車更々共に山脚に入り、旌旆且く從ひて渡頭に留まる。精舍、泉の声は清く澗澗たり、高林、雲の色は淡く悠悠たり。經を談じ奥を道ひて愁言し去き、明日瞻思して郡樓に上らん。

〔語釈〕

○深造 『孟子』離婁下に「君子深く之に造るに道を以てするは、其の之を自得せんことを欲すればなり」とある。

○送趙清猷一詩 『周敦頤集』に「公暇頻陪塵外游、朝天仍得送行舟。軒車更共入山脚、旌旆且從留渡頭。精舍泉声清澗澗、高林雲色淡悠悠。談終道奧愁言去、明日瞻思上郡樓」(「香林別趙清猷」)とある。趙清猷は趙抃(一〇〇八—一〇八四)。仕官して高位の者も恐れずに弾劾し、王安石と合わなかった。趙清猷は周敦頤を高く評価しており、彼を推薦している。

○軒車 大夫の乗る高く大きな車。

○山脚 山のふもと。山麓。

○旌旆 旗の総称。

○渡頭 わたし場のあたり。

○精舍 学舎。

○澗澗 水の流れるさま。

○瞻思 仰ぎ慕う。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)



本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

〔校異〕(四)

「尊經閣文庫本」は「□」を「及」に作り、本則はこれに従って読んだ。

【二十七】

陰陽奇耦之象、無物無之、真是奇異。晦翁常言之矣。以愚觀之、豈惟有形之物為然。雖無形之理、亦成異見在。昔仲尼之門有顏曾、便有游夏分兩路去、至宋而朱陸同異分兩路去、以至於今。幸我先師興起、大明此學。然察之、士習其勢、又復駸駸矣。愚是以懼也。豈惟是哉。如中国既有仲尼、便生釈道二教。陽一陰二、其耦儼然。即如西方之教有迦葉矣、便有阿難、有盧能矣、便有神秀。造化之妙、無獨必有對也。

〔訓読〕

陰陽奇耦の象、物として之無きこと無し、真に是れ奇異なり。晦翁常に之を言へり。愚を以て之を觀るに、豈に惟だ有形の物のみ然りと為さんや。無形の理と雖も、亦た異見を成さんや。昔仲尼の門に顏・曾有れば、便ち游・夏有りて兩路に分(去)かれ、宋に至りて朱・陸の同異、兩路に分(去)かれ、以て今に至る。幸に我が先師興起し、大いに此の學を明らかにす。然るに之を察するに、士は其の勢を習ひ、又た復た駸駸たり。愚是を以て懼るるなり。豈に惟だ是れのみならんや。中国に既に仲尼有るも、便ち釈道の二教を生ずる

が如し。陽は一、陰は二、其の耦は儼然たり。即ち西方の教に迦葉有れば、便ち阿難有り、盧能有れば、便ち神秀有るが如きなり。造化の妙は、独無く必ず対有るなり。

〔語釈〕

○陰陽奇耦之象、無物無之、真是奇異。晦翁常言之矣 『朱子語類』第七十五、易十一、上繫下、第十二章一条に「易は只だ是れ一箇の陰陽奇耦に過ぎざるのみ、千變万變、則ち易の体立つ」とある。

○奇耦 『易』繫辭下伝に「陽卦は奇にして、陰卦は耦なればなり」とある。

○迦葉 摩訶迦葉。頭陀（煩惱をふるい落とす少欲知足）第一として著名。

○阿難 阿難陀。多聞第一として著名。

○盧能 慧能。南宗禪の祖。五祖弘忍門下。

○神秀 北宗禪の祖。五祖弘忍門下。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【二十八】

觀震沢語録、有以見伊川先生所造之高、為後儒所掩多矣。

〔訓読〕

震沢の語録を觀るに、以て伊川先生の造る所の高き、後儒の掩ふ所と為ること多きを見る有り。

〔語釈〕

○震沢語録 震沢は王蘋の号。「震沢語録」は『河南程氏外書』卷第十二、「伝聞雜記」の一部分を構成する。

〔校異〕(一)

本則是『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則是『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則是『明儒学案』には収められていない。

【二十九】

上蔡語録載明道先生語曰、儒之与釈有非同非不同处。先生之言引而不發、惟能觀会通者知之。

〔訓読〕

上蔡語録に明道先生の語を載せて曰く、儒と釈と同一非ずと不同に非ずの処有り、と。先生の言引きて発せず、惟だ能く会通を觀る者のみ之を知る。

〔語釈〕

○儒之与釈有非同非不同処 『上蔡先生語録』卷之中に「釈と吾が儒と同一非ずと不同に非ずの処有り。蓋し理の精微の処、纒かに私意有らば便ち支離なり」とある。

○会通 『易』繫辭上伝に「聖人は以て天下の動を見る有りて、其の会通を觀、以て其の典礼を行ひ、辭を繋けて以て其の吉凶を断ず」とある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。

【三十】

康節先生所造之高、有詩曰、自有吾儒樂、人多不肯尋。以禪為樂事、又起一重塵。又詩曰、飽食豐衣不易過、日長無事奈愁何。求名少日投宣聖、怕死老年親釈迦。妄欲断縁縁愈重、微求去病病還多。長江一片平如

練、幸自無風又起波。真妙契也。然又有照管不到處、為技所使、則復起塵。却問雷從甚處起、被伊川一句起處起將塵一風掃淨。雖禪門之棒喝、何以加於此乎。

〔訓読〕

康節先生造る所の高し、詩有りて曰く、自ら有り吾が儒の楽しみ、人多くは肯へて尋ねず。禪を以て樂しき事と為せば、又た一重の塵を起こす、と。又た詩に曰く、飽食豊衣、過ごし易からず、日長く事無きも愁ひを奈何せん。名を求めて少き日に宣聖に投じ、死を怕れて老年に釈迦に親しむ。妄りに縁を断たんと欲するも縁愈々重く、病を去るを微求もとむるも病還つて多し。長江の一片、平らかにして練の如く、幸自ら風無きも又、波起つ、と。真に妙契なり。然れども又た照管の到らざる處有りて、技の使ふ所と為らば、則ち復た塵起つ。却つて雷は甚くの處より起こると問ひ、伊川の一句起くる處に起くるに塵を將て一風に掃淨せらる。禪門の棒喝と雖も、何を以て此に加へんや。

〔語釈〕

○自有吾儒樂、人多不肯尋。以禪為樂事、又起一重塵 『擊攘集』卷之八「再答王宣徽」に「自有吾儒樂、人多不肯循。以禪為樂事、又起一重塵」とある。

○飽食豊衣不易過、幸自無風又起波 『擊攘集』卷之十四「学仏吟」に、「飽食豊衣不易過、日長時節奈愁何。求名少日投宣聖、怕死老年親釈迦。妄欲断縁縁愈重、微求去病病還多。長江一片常如練、幸自無風又起波」とある。

○宣聖 孔子。

○幸自 本来、もともと。

○照管 きちんととりくむこと。

○雷従甚処起、被伊川一句起処起将塵一風掃淨 『上蔡先生語録』卷之下に「今年、雷、某処に起る。…又問ふ、甚処に起ると。伊川云く、起る処に起ると」とある。

〔校異〕(一)

本則は『陽明先生遺言録』には収められていない。

〔校異〕(二)

本則は『王文成公全書』には収められていない。

〔校異〕(三)

本則は『明儒学案』には収められていない。